日本ギャスケル協会
第 38 回大会

2026 年 10 月 3 日（土）13 時 00 分より
於：名城大学 天白キャンパス 共通講義棟南 4 階 S402
〒468-8502 名古屋市天白区塩釜口一丁目 501 番地

13:00〜13:05 開会の辞　日本ギャスケル協会会長　関田　朋子（早稲田大学教授）

総合司会　西垣佐理（近畿大学教授）

13:05〜13:35 研究発表　司会　矢野奈々（北里大学専任講師）

「埋められるものと掘り起こされるもの——Provincial Fiction として読む *A Dark Night's Work*」
村上幸大郎（宮崎公立大学准教授）

13:35〜15:55 シンポジウム「19 世紀の旅する／彷徨う女性たち」

司会・パネリスト：志渡岡　理恵（実践女子大学教授）
パネリスト　石井　麻璃絵（東京工芸大学助教）
パネリスト　大久保　譲（専修大学教授）
パネリスト　山口　みどり（大東文化大学教授）

15:55〜16:05 Break

16:05〜16:45 総 会

16:45〜16:55 Break

16:55〜17:55 講 演　司会　関田　朋子（早稲田大学教授）

「〈共感〉から〈脱・共感〉へ——ヴィクトリア朝小説にみる都市労働者・貧民への眼差し」
田中　孝信（大阪公立大学特任教授）

17:55〜18:00 閉会の辞　日本ギャスケル協会副会長　松本 三枝子（愛知県立大学名誉教授）

18：30〜20：30　懇親会
海鮮酒場　魚雑葉
名古屋市営地下鉄鶴舞線　塩釜口駅２出口より徒歩約１分

本大会に関する問い合わせ：日本ギャスケル協会事務局　E-mail:h-endo@redcross.ac.jp
〒150-0012 東京都渋谷区広尾 4-1-3　日本赤十字看護大学　遠藤 花子 研究室

梗概

研究発表

司会：　矢野　奈々（北里大学専任講師）

「埋められるものと掘り起こされるもの――Provincial Fiction として読む *A Dark Night's Work*」

村上　幸大郎（宮崎公立大学准教授）

A Dark Night's Work（1863）では、ダンスターの死体が鉄道敷設工事の際に掘り起こされ、彼がお金を盗んでアメリカに逃亡したという話が根も葉もない噂であったことが明らかになる。鉄道に象徴される、地方に押し寄せる近代化の波が隠された真実を暴く展開は、この点だけにとどまらない。ロンドンから来たダンスターが“methodical”な管理によってウィルキンズ氏の財政状況を把握する展開もまた、都会から流入する要素によって虚構が暴かれる構図である。つまり本作は、「なあなあ」で成り立っていた田舎の社会が、虚構を許容しない都会のロジックに直面する Provincial Fiction としての側面を持つ。鉄道敷設による死体発見は、エリナーを罪の告白とその後の救済へ導く不可欠な契機ではある。しかし、何もかもを明らかにする風潮に対しギャスケルは必ずしも肯定的ではない。本発表では、不可避な近代化に対峙する様を描く上での、ギャスケルのアンビバレントな感情について考察したい。

シンポジウム

「19 世紀の旅する／彷徨う女性たち」

司会・パネリスト：　志渡岡　理恵（実践女子大学教授）

19 世紀に女性が旅をするとはどのような経験だったのだろうか。イギリスでは、鉄道や蒸気船の登場、Thomas Cook による旅行会社の立ち上げなどにより、旅のありかたが大きく変化した。交通網や宿泊施設が整備され、ガイドブックなど旅のツールが普及するにつれて、団体旅行に参加する女性や単独で旅に出る女性が増え、行先や目的が多様化した。

本シンポジウムでは、このような転換期に国内外を移動した女性の旅と、文学作品に描かれた女性の旅のありように注目する。それぞれ異なる経歴と関心を持つ女性たちは、どのような旅をし、旅を通してどのように変化していったのだろうか。Graham、Gaskell、Trollope、Bickersteth の生涯や作品から考察する。

「Maria Graham の南米旅行記における知の生産と自己形成」

1808 年に海軍士官の父親に同行してインドへ渡ったことを皮切りに、イタリア、ブラジル、チリ、ドイツ、ババリア、オーストリア、フランスへと次々に旅した Maria Graham は、Dolan の言う「博学な英国女性」のひとりだった。彼女は、ラテン語、フランス語、イタリア語、植物学、歴史、地理、英文学、音楽、デッサンを学び、Dante、Gibbon、Burke、Reynolds らの著作を読み、スコットランド啓蒙思想家たちと交流した。彼女の著作は旅行記にとどまらず、美術書、歴史書、植物学関連書にまで及ぶ。チリで遭遇した地震に関する論文は、英国の地質学会の学会誌に掲載され、議論を呼んだ。ブラジルでは、ポルトガルによる支配の終焉を目撃し、皇帝の長女の家庭教師を務めた。

飽くなき知的好奇心が顕著なグレアムの旅行記には、訪れた国の歴史、宗教、名所、美術、風景、動植物、食物、言語、慣習など多岐にわたる情報が、緻密なスケッチと共に収められている。本発表では、夫の死後も独立初期の南米に留まり執筆した旅行記(1824 年)を読み解き、旅を通した彼女の知の生産と自己形成のありようを詳らかにする。

志渡岡　理恵（実践女子大学教授）

「『北と南』における列車、馬車の旅」

『北と南』のヒロインのマーガレットは本来、徒歩愛好家である。しかし、南部から北部の工業都市ミルトンへ移住すると、マーガレットは彼女が好まない馬車だけでなく、列車という近代に現れた移動手段を活用することになる。旅のなかで、マーガレットは移動性を発揮し、自身が置かれた空間を拡大していく。マルクス哲学者であるマーシャル・バーマンは、近代の環境と経験は地理、民族、階級、国家のあらゆる境界を超えるが、近代性は人々を断絶、崩壊と刷新、闘争と矛盾、曖昧さと苦悩の大渦に引きずり込む、と主張する。マーガレットの旅は地域差や階級差、文化の違いといった社会における様々な「境界」を超えるものであり、彼女は移動をとおして近代化しつつある社会のなかで自身のアイデンティティを模索する。本発表では、女性の旅や放浪の新しい移動手段として19 世紀に登場した列車、そして、それ以前からの移動手段である馬車に着目し、マーガレットが移動性（モビリティ）を通して近代性（モダニティ）を経験し、苦悩し、受容し、適応していく姿を考察する。

石井　麻璃絵（東京工芸大学助教）

「Anthony Trollope 作品の女性旅行者たち――順応と逸脱」

ギャスケルの同時代人 Anthony Trollope は、*An Autobiography* に明らかなように、精力的かつ多産な作家であると同時に、世界を股にかける旅行家でもあり、４冊の海外旅行記を公刊している。しかし、彼の長編小説の多くはイングランドやアイルランドの社会を描くことに専念し、旅行の場面が現れても、副次的な扱いを受けていることが多い。その意味で、旅行家トロロープの本領はむしろ海外を舞台にした多くの短編小説に見られるといえよう。トロロープが、短編小説において長編小説には見られない主題やキャラクターの実験を行っていることは夙に指摘されているが、女性旅行者の表象についてもそれは同断である。ことに短編集 *Tales of All Countries* (First Series, 1861; Second Series, 1863)収録の諸作に登場するイギリス人女性旅行者たちは、ヴィクトリア時代ミドルクラスのあるべき女性像から大胆に逸脱してみせる。'Relics of General Chassé'では五人組の女性観光客の図々しくも滑稽な振る舞いが描かれ、'An Unprotected Female at the Pyramids'のヒロインは一人旅の自由を主張する。一方、'A Ride Across Palestine'には難を避けるべく男装して旅する若い女性が登場し、'Mrs General Talboys'のタイトルの婦人はローマで浮名を流す。本発表では、これらの短編の分析をとおして、しばしば保守的とされるトロロープの作品世界において女性旅行者の形象が果たす役割を考察する。

大久保 譲（専修大学教授）

「ミカドの帝国の 8 週間――May Bickersteth, *Japan as We Saw It* 」

スエズ運河や太平洋鉄道が開通した 19 世紀後半には、女性宣教師もまた「旅する女性」を代表する存在となった。1886 年に主教として日本に派遣されたエドワード・ビカステスは、東京に高学歴の宣教師を集めようと腐心し、特に、当初は異例であった大卒女性の登用に尽力した。実家ビカステス家では東京宣教に特化した支援団体 St Paul's Guild を立ち上げ、広く支援を呼びかけた。その書記を務めたのが主教の妹メイ（Mary Jane）である。

1891 年、メイ・ビカステスは両親と共に世界周航の旅に出、2 か月に渡って日本を視察した。*Japan as We Saw It*（1893）はその旅の記録である。そこには近代化に舵を切る明治日本の各地におけるミッションの働き――特に女子教育の状況――が、土地の風物を織り込みつつ綴られている。遭遇した濃尾地震の生々しい体験談は、その山場となる。

ビカステス主教は志半ばで 1897 年に世を去るが、残された家族の働きもあり、実際に 20 世紀初頭の東京は大卒の女性宣教師の憧れの地となっていった。そこで本報告は、有望な宣教先として日本に期待し売り込むプロモーションとして、メイ・ビカステスの日本旅行記を読んでいきたい。

山口　みどり（大東文化大学教授）

講演

司会：　閑田　朋子（早稲田大学教授）

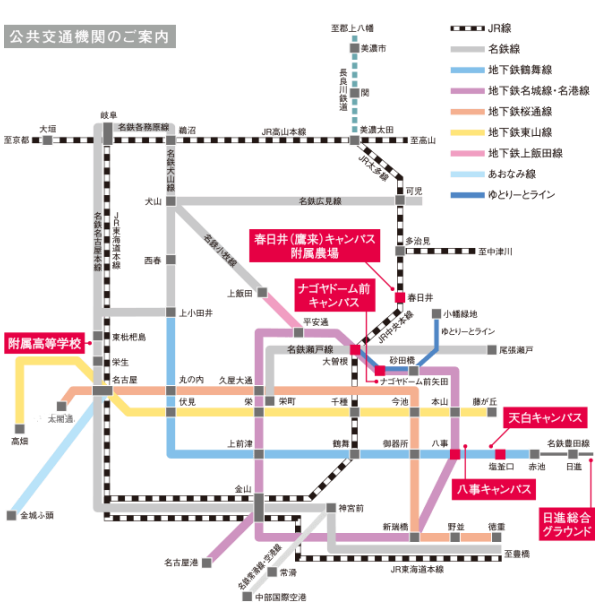
「共感」から「脱・共感」へ――ヴィクトリア朝小説にみる都市労働者・貧民への眼差し

田中　孝信（大阪公立大学特任教授）

19 世紀イギリスは都市労働者や貧民の生活が深刻な社会問題となり、中流階級の小説家たちはそれを作品世界に取り込み、読者の関心と道徳的感受性に訴えかけようとした。その流行は大きく二つの時期に分けられる。一つ目が 19 世紀半ばのイングランド北部・中部の工業都市を舞台にした「社会問題小説」であり、もう一つが世紀末ロンドンのイースト・エンドを舞台にした「スラム小説」である。しかし、両者では労働者階級に対する心的態度に著しい差異が見られる。本講演では、それが何に起因し、いかなる形で表象され、どのような意義を帯びるのかを、「共感（sympathy）」の概念を軸に検討する。具体的には、中流・上流階級女性の慈善活動に焦点を合わせながら、ギャスケルの『北と南』（1855）を起点に、ベサント『あらゆる種類と階級の人びと』（1882）、ハークネス『ローブ大尉』（1889）、モリソン『ジェイゴーの子ども』（1896）、さらにはジェイムズのモダニズム都市小説『カサマシマ公爵夫人』（1886）へと読み進めることで、「共感」がどのように変質し、あるいは拒否され、ついには機能不全に陥っていくのかを明らかにしたい。こうした比較を通して、中流階級の階級観およびジェンダー観の変化について、新たな知見を提示することを目指す。

アクセス

大会会場



懇親会

懇親会（事前申し込み）　18：30～20：30
海鮮酒場　魚雑葉
名古屋市営地下鉄鶴舞線　塩釜口駅２出口より徒歩約１分
会費：4.500 円（当日徴収 お釣りのないようにご準備お願いいたします）